Osaka University Knowledge Archive

Title	阪大病院の国際化から、これからの国際医療を見据える
Author(s)	王, 駿平
Citation	平成27年度学部学生による自主研究奨励事業研究成果報告書. 2016
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/54679
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

申請先学部　医学部医学科
採択番号　　No.1

平成27年度学部学生による自主研究奨励事業研究成果報告書

ふりがな 氏　　名	おう　しゅんぺい 王　駿平	学部 学科	医学部 医学科	学年	3年
ふりがな 共　同 研究者名	あさと　みゆり 安里　美夕里	学部 学科	医学部 医学科	学年	2年
	おおい　りょう 大井　遼		医学部 医学科		1年
アドバイザー教員 氏名	中田研	所属	大阪大学医学部附属病院 国際医療センター		
研究課題名	阪大病院の国際化から、これからの国際医療を見据える				
研究成果の概要	研究目的、研究計画、研究方法、研究経過、研究成果等について記述すること。必要に応じて用紙を追加してもよい。				

1、研究目的

①着想に至った経緯

大阪大学医学部附属病院(阪大病院)には多数の外国人患者が来院しており、国際化の波が押し寄せている。実際、外国人患者向けの案内も設置されるなど、その変化を感じることも多い。それでは、いざ医療現場ではどのように対応しているのだろうかと聞かれると、答えに窮してしまう。言語の違いのみならず、文化や制度の違いが臨床の場で障害になるケースも少なからずあると推測される。将来医師になる我々が、国際化する医療現場に対して、学生時代からどのように備えるべきかを考える目的で、本研究を開始した。また、当団体はこれまで、タイのマヒドン大学の医学生と長年交流を続けており、その他外国人医学生との交流を積極的に行ってきた。かねてより国際医療に関心を持って活動していたことから、日頃の活動を深める意味でも意義深いと思われる。

②何をどこまで明らかにしようとするのか

国際化する医療現場では、様々なツールを活用して円滑な意思疎通を図ろうとしている。その一つが「医療通訳」である。我々は医療通訳が行われる実際の現場を見学し、患者側・医療者側・医療通訳側の視点を調査することで現状の問題点をあぶり出すことができると考えた。また、阪大医学部生の、医療通訳・医学英語・医療の国際化に対する意識・備え等について調査することで、同時に大阪大学での医学教育のあり方についても検討できると考えた。

③本研究の特色・予想される結果と意義

現在、日本を訪れる観光客は増加傾向にあり、医療ツーリズムのみならず、医療機関を外国人が訪れるケースは増えていくことが明らかである。そのような状況の中、外国人を診察し治療する際に、文化や保険制度の違い等により壁にぶち当たることもあるだろう。それゆえに、学生のうちから国ごとの違いを認識し、将来に備えておくことは重要である。本研究の実施は、このグローバル社会において必然であると言える。

本調査では、違いの認識の重要性が明らかになることが期待される。また、その理解が、我々の普段の国際交流活動にも活かされることが望ましい。そして最終的に、外国人診療の質の向

上や医学教育の改善にもつなげることができると考えている。特に、大阪大学は外国語学部や人間科学部等を擁する総合大学であり、外国人医療にも対応した国際医療センターが設置されるなど、本研究を行うには適した充実した環境であると言える。

２、研究計画

我々の研究活動をサポートいただけるよう、阪大病院の国際医療センターの先生方にご協力をお願いした。日頃は文献検索による情報収集や意見交換に努め、長期休暇等を用いて阪大病院やりんくう総合医療センター国際診療部などの臨床現場での見学、各種医療通訳講座の聴講を行うこととした。また、医療通訳に取り組んでいる専門家の方々へのインタビューも積極的に行い、多角的に外国人診療を調査することとした。そして、医療通訳者や医学部生へのアンケート調査も同時並行で行っていくこととし、短い研究期間ではあるが最終的に学生として外国人診療における問題を打破するようなアイディアを生み出すことを目標に据えた。

３、研究方法

研究方法を以下に列挙する。下記の活動に加え、適宜、国際医療研究会での会議を開催し、学生間の意見交換に努め、ブラッシュアップを図った。

・阪大病院・国際医療センター訪問
・通訳現場の見学(阪大病院・りんくう総合医療センター国際診療部)
・医療通訳者・研究者へのインタビュー
・医療通訳関連の講座の聴講(「医療通訳養成コース」「国際交流人材養成講座」)
・「医療通訳養成コース」受講者へのアンケート調査
・大阪大学の講義の聴講(「健康・医療イノベーション学」「医療通訳実践論」)
・大阪大学医学部生などへのアンケート調査

４、研究経過

実施スケジュールは下記の表の通りである。

表：国際医療研究会　自主研究実施スケジュール

2015 年 7 月　大阪大学医学部附属病院・国際医療センター訪問
2015 年 8 月 1 日　医療通訳養成コース見学
2015 年 8 月 25 日　りんくう総合医療センター・国際医療センター見学
2015 年 10 月 2 日　JAMI 小笠原理恵様インタビュー
2015 年 10 月 26 日　MEDINT 村松紀子様インタビュー
2015 年 10 月 28 日　JAMI 中村安秀先生インタビュー
2015 年 11 月 7 日　医療通訳養成コース見学
2015 年 11 月 8 日　ヨーナス・キリシ様講義聴講・林田雅至先生インタビュー
2015 年 11 月 11 日　大阪大学保健センター守山敏樹先生インタビュー
2015 年 11 月 28 日　医療通訳養成コース見学
2015 年 11 月 29 日　南谷かおり先生講義聴講(大阪国際交流センター)
2015 年 12 月 1 日　りんくう総合医療センター・国際医療センター見学
2015 年 12 月 3 日　「医療通訳実践論」聴講

５、研究成果

成果として大きく 2 つ挙げられる。まずは、国際医療、特に日本国内での外国人診療の現状を調査してまとめる必要があると感じ、下記のようなレポートを作成した点である。調査する中で、外国人診療において大きな役割を果たす「医療通訳」という存在が十分に知られていないことに危機感を覚えたため、このレポートが一般の目に触れることを念頭に置き作成している。

次に、総合大学としての阪大の強みを活かす取り組みの芽ができた点である。医療従事者が医療通訳と十分な連携を取ることの重要性も感じ、また学部生時代からその事実を認識する必

要があるため、外国語学部学生とコンタクトをとって、医療通訳の知名度向上および双方のスキルの向上を目指した取り組みについて、現在進行形で検討している段階である(その他の活動案も以下に示す)。これらの点で、当初の目的を達成していると言える。

表：今後の取り組み案

・大阪大学の留学生に対してアンケート調査を行い、留学生の医療アクセスを調べる。
・外国語学部学生と医療系学生が共同で、ロールプレイングなどを通して外国人医療・医療通訳について学ぶ。
・大阪大学医学部との海外協定校との共同調査。
・ポスターや動画を用いた医療通訳の知名度を高める取り組み。
・ピクトグラムを用いた指さし会話集の作成。

＜外国人診療に関するレポートについて＞

当団体の研究結果を 50 ページ程度のレポートとしてまとめた。報告書のページ数の都合上、ここではその紹介にとどめる。テーマは下記の通りである。外国人診療の現状ついて実例を挙げて述べ、そこから問題点を抽出している。また、阪大病院やその他の自治体での対応策の具体例を述べた。外国人診療で実際に用いられているツールの特徴を述べた上で、今回は「医療通訳」に焦点を当てた。医療通訳の先進的な海外事例を述べ、医療通訳の現状としてシステムや教育の実情を記載している他、医療通訳者や大阪大学医学部医学科学生へのアンケートを通して生の声を拾い上げている。これらの調査結果をもとに、学生の目線から今後どのような対応が望まれるのかを多角的に考察し、特に学生としてわれわれがどのような行動をとれるのかを検討した。さらに、レポートの末尾に利用可能な問診票等を参照として挙げ、外国人診療に役立つよう実用面にも配慮している。

表：自主研究にて国際医療研究会が作成した外国人診療に関するレポート内容一覧

～目次～

1.外国人が増加する日本の現状	9.海外の医療通訳
2.阪大病院における医療の国際化	10.医療通訳教育
3.阪大病院での対応	11.医療通訳の抱える課題
4.外国人診療の実例	12.どう外国人診療と向き合うべきか
5.どのような問題が生じるか	13.アンケート結果
6.外国人診療でのツールとそれぞれの特徴	14.今後の当研究会の活動案
7.医療通訳とは	15.まとめ
8.医療通訳システム	

(付)参考文献、ツール・問診票等のリスト

６、最後に

今回の調査で注目した「医療通訳」。正直なところ、この調査前にはあまり馴染みのない存在であった。しかしこの調査を進める中で、大阪大学も含め身近なところで様々な取り組みが行われていたことを知り、驚きの連続であった。特にりんくう総合医療センターでの見学では、目の前で外国人対応が行われており、外国人診療の現状を目の当たりにした。まさに「百聞は一見にしかず」と思わされる経験であった。

外国人にとって、慣れない医療機関において「伝えられる安心感」は計り知れないものだと思う。その点で医療通訳の果たす役割は大きいと言える。そして現在、東京オリンピック・パラリンピック開催をきっかけとしてその注目度は高まりつつある。しかしながら、職種として確立されていないなど問題は山積したままだ。そして医療通訳だけでは対応できない状況も多々あるため、ICT を含め他のツールとうまく組み合わせていくことが不可欠である。

また、このような話題ではどうしても訪日外国人にばかり目が行きがちだが、昔から日本に暮らす在住外国人の存在を忘れてはならない。この度の医療通訳への注目の高まりが、うまく

在住外国人へのサービスへと結びつくことが強く望まれる。

今の日本では、「外国人」をひとくくりにして語ってしまったり、「外国人」だからという色眼鏡で見てしまったり、ということが往々にしてある。外国人診療は互いの文化が触れ合う場であり、時としてぶつかり合うこともあるだろう。しかしこの現状としっかり向き合い、改善していこうと動いていくことは、このグローバル社会においてもはや必然となっている。日本人医療はどうなるのかという声が上がることは当然であるし、圧迫されることはあってはならない。しかし、日本に長年暮らし税も納めている在住外国人に対してのサービスの充実は当然のことである。また、外国人診療の改善により外国人にとってやさしい医療になればそれは日本人にとってもよりよい医療となるだろう。「国際医療」と聞けば海外での医療をイメージしてしまうが、日本国内でも現実に、医療のグローバル化が求められているのである。これからも、国際医療研究会では、海外の医療のみならず、足元にもしっかりと目を向け、日本における医療の諸問題に対峙し、行動を起こしていきたいと考えている。

最後になったが、阪大病院国際医療センターの小笠原祐希子先生、中田研先生をはじめ、スタッフの先生方、りんくう総合医療センターの南谷かおり先生、MEDINT の村松紀子様、JAMI の中村安秀先生、小笠原理恵様、大阪大学保健センターの守山敏樹先生、大阪大学外国語学部の林田雅至先生、アンケートにご協力いただいた医療通訳養成コース受講者の皆様、大阪大学医学部医学科学生など医療系学生の皆様、その他お世話になった方々に感謝の意を表する。